

823
MvN2

紙江入楚

行
幸

29

行幸

三十六歲

太政大臣

西對娘君見物

十二月大原野行幸

西對娘君見物

藏人尤為尉為清使雖一校自門裡就太政大臣

次日源氏君後西對清物給

三十七歲

日

三乘大臣自去年冬病惱

二月朔日源氏後三乘大臣給

玉勢君受申大臣給

大臣以清文被招請門大臣殿

着布袴

門大臣系三乘大臣

源氏君對面

諸玉勢君見物給

十六日玉勢君清裳見物

自之采衣被執言
中衣被裳唐衣并發上具
常陸衣被送裳衣
口大巾結腰給
近江君系女并殿申口信と所之由更
口大巾系女并之次被る出近江君更

行幸

河津

以分なる名也並

必并秘多日

西松房

初月五日し初より廿二日迄は、いふきよは、さうは、えいひり、わじ
初月五日より、又、初は、大原野の行幸とあり
源氏六、七月也、此七、八月の二、三月まであり、
行幸は、大原野の行幸、
或、所説は、五、六月と、行幸と、名、所、の、と
此、事、と、名、何、し、ん、ゆ、き、と、説、く、
初、月、並、の、名、は、教、り、
同、三、四、月、並、同、五、月、並、六、月、並、七、月、並、八、月、並、
行幸、同、九、月、並、大原野の行幸、
此、事、と、名、何、し、ん、ゆ、き、と、説、く、
初、月、並、の、名、は、教、り、

必
玉
う
と
ほ
め
お
り
は
え

一、可然、縁、く、ふ、と、
上、義

玉ふりてはなれど
いそよふらんを
おしへるよりこ
ぞ

こゝから一階へ

又源氏黒のちりいけり

秘
箋
源の下よ会うけり
あり川宮
いふく
いふより
金砂の

うふりかたりとありの流
ばあうを

乙
 とうくにんちんきとせきふのく下にあつたところの結

一、

何事ともかくもいふことゝあはれ川をいふことゝんまめ

と名付の時よのやまおけへりうそいとおけりとも利の附を

人如三月時

養名取骨公如竹下

粟川分爲兩河、公時アリ在河海

或沛鏡よりあり
いゝぬきありと
いふなり

縁より色にけゝく海のおりたありいゝまうゝんのかおの公普を

の勝とと何れ世中のとりあていなるを乞ふ

人あまのりて

小蝶をとりて玉うと

此書をうかりおぼえするも公へ海と見たり曉所ん

とありしを
或は税に當てては
宗とありしを
寺に改めし

かゝとうとう——まゝ——のめ——とあいあはせくほのうとけり

新編のそよ

かめお

叙
四
十
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

何よりよつてとまはく^めあ^まる

家
内大書の世告魚のきくろるん

言類常及此意小色凡々々々

何れもかりいらぬあゝ字々々々

義
再高木也

予と云うは又源氏の密通と云うは之を承るや否や

いさな

和名月太王玉より此等と知得く又原に寄ぬと邪之をさふ

ふに大なる西の空をわたりて海にあらうとおもふ

必言致仕也。何の事なきや。一之形なり。一きる。

煥りふあり
 致仕右大臣の所公よりわかうりありのよと終るすか

うみりゝあ　ふとのわんちう　うきと受ひぬる

玉うゝまゐくまゐいふあゝうゝわじとちいぢ

いさふり浮り又親王位なり皆仁和ノ例也左大臣位
なり延長ノ例也仁和ノ分シ花鳥李部王記云自朱雀門堂五
葉大路折至桂河邊上并輿就握群中下馬上御輿郡中宗
後淳橋方丹上自桂路入野口以上等

同記云宮飼親王

公立木列其裝束赤色袍親王公口及殿上侍中六位以
上着麴塵袍諸衛官人着褐衣服行騰諸衛服上及府掌以
上着服卷行騰悉然及唯服者四位五位用虎皮六位以下阿
多良悉及鹿兒皮通無皮者用也以上武官着小平馬寮内舍人
亦同諸衛麴塵袍親王公口着地摺布衣及袴亦用赤木葉也併袴
小襖子餅袋大着着豹皮服及到野口着狼皮行騰四位以
下大井河行幸

馬副

馬副

三人しせいふり下り人し也
三公同言幕後都合亦一騎也此介親王
左右大臣中

ありし一りきり時園白の京車より後隔し彼作但此行幸の時
先例如何可尋

青衣のうへのおねえいそり下りぬとぬと五位六位より上り

青衣の麴塵一日晴は必きりし今六位は人極福なり袍

是ころの時のことよりいふと京車より

何云一日之時依諸中着麴塵袍野行幸時左方麴塵名赤日

極地又摺衣右方麴塵着青白極地摺衣之由疑將記見

李部王記延長六年大原野幸其裝束赤色袍親王公口殿

上侍中六位以上着麴塵袍今案全上赤赤袍着給其外親王

公以下皆青色麴塵袍下襲は菊深也是ハ舊より

の出入とより承和之より大井川行幸よりかくそりし

持傷の例なり

雷くくくくくくくく

何云延長二年表六の四月十九日十月二日

川行幸あり大井川入せり行幸あり

うーいんうんやういん

くよすくまううん

いん人 允信 日本紀

いんいんいんいん

いん 秘 必云 昌泰元年

野行時車中之如

半膽天部或中半身或懸露面 見紀

まーてううりり

まーかよあふん てもうあふん

中のぬあふん

羽林のぬあふん てもうあふん

きいん

何と目いん

いんあふんいん

半いんいん

きあふんいんいんいんいん

まーいんいんいんいんいん

いんいんいんいんいん

いんいんいんいんいん

いんいんいんいんいん

源氏のおいん

いんいんいん

トウらあふん

いんいんいん

いんいんいん

あふんいん

いんいん

いんいんいん

いんいんいんいんいん

いんいんいんいんいん

いんいん

いんいん

いんいん

いんいん

いんいん

いんいんいん

いん

いんいん

いんいんいん

いんいん

いん

いんいんいんいんいん

いんいんいんいん

いんいんいんいん

いんいんいんいん

いんいんいんいん

みくらくひけしりよるく

河莊子曰文王昔者寡人夢見

良人黒色而顰

疏云文王之父季歴生存之日黒色多顰

いづくは女のけくろひいふる

事云字さしつゝり親り

らへくといひたりあり

顰るは顔ち抑ふ事なり

あふ年れ顰るよふ似ううんとして 秘云ちねい年少くふまうく

顰るすゝしはちねい顰るううのあふ顰るふと似合ふきと

くねい顰るううといふまうくよふけのううれ切りのあふ

りきねからうた

まうくねふは顰るううのあふううのあふ

おとれ君のなり

義云ううのかこつ秘曰 源のまう

とけねのううよふあふせのうう

まうくねふのううのあふううのあふ

あふまうくううのうう

あれくきねちりりくえあれく

秘云ううれくえあれく

ううくおひりといふううのあふううのあふ

とふひりり

義云ううれくえあれくのううのあふううのあふ

さあうあうーさあふわくううーまうらるのあふ

さううきさうーあううのあふーさううのあふ

又顰るのううのあふ

あうてあふなりーまうーけくううーううとあふれり

季記云從弟季行猶至市與墳進朝膳款王公曰若平張座於

墳項眺望ー呂中ねり右權中ねり朝長かね中正近

持津金宮釵上降墳路九兵衛佐仲連假市花料理人死之

維殿上六位昇組貝津尉子死胎市産二産人頭時望朝長

治侍從以衛賜王公饌侍從斗長益送之 平張也

あふううーあふーかりねりうういあふううのあふ

秘云あふううーあふううー一説あふううのあふ

あふーあふううー改のあふー一説あふううのあふ

服白椽市衣延在市時天皇市右近馬場改著直衣 昌泰

元年野行幸市赤白椽唐綾市衣入野之後若持市衣

今榮野入らせ給く後主上ノ服市衣改らり 例モアリ

又持衣とせりしと云ふ事ありし事

又云必多し其衣を脱ぎて持せりし事ありし事
三りと云ふ事ありし事
多りと云ふ事ありし事
めつと云ふ事ありし事
左の事といひし事
けりし事
後此の事ありし事
少しと云ふ事ありし事

私云此秘箋亦一同の上の秘箋なりといふ事ありし事

六条院より内入りし事ありし事

ふといふ事ありし事

右の事といひし事

源氏より可執し申さる事ありし事

六条院より多門内入りし事ありし事

原記云六条院被負酒二荷炭二為火炉一具

殿上六位昇之市並解一靴至雞洞而完供市完公に料近
衛持監役之 李記云延長四年十一月六日有北野行幸

其日余因物忌不希未刻上還船因茂春寂後獲

又云六条院書室等号以不太以不實諸抄不及此抄其如何

事ありし事ありし事

源氏の所縁の事ありし事

又云内門より供をとりし事ありし事

源氏より列人の所縁の事ありし事

内記云延長四年十一月六日有北野

行幸其日余因物忌不希

又云内記云延長四年北野行

幸之時余人内記云内記云

後つりし事ありし事

北野より源氏へをせし事ありし事

北野より源氏へをせし事ありし事

さういふこと

幾の云九条右近相集米産より雄一匹

付る枝を

付る枝を

果を七尺五寸着返す柳ヨリ果をセハクメ表裏毛生タリ芝と名
付果と云一説云たりん果といつたに於る之枝を隔る雄を
たわけく付雌と名をくすも雄とたわけく付果の雌を
賣すの果を付根にみく

又舊野より人の件(遺)に
こ田尺果枝を刀目とツケヌメを折ハシラカメタ一匹分根を
四条大細之隆親に記果六七尺雌雄一匹とす

又大食大養元服移徒如此用之 唐而(遣)に根川小松
付く 秘文 義氏朝に記舊野より人のり人雄を送り果

あつたも 藤原とく 何れとす 又果の梅枝の

果の付るより 大食大養用之 又初果の朝雄とく せす時作は也
又梅枝 忠仁に伊勢也

一松崎の付る山崎 義家記に後不す

一鶴の果枝を

一小鳥といふ果枝を

一雀の竹を十月より 果をトイリ

此の文説也

いと幾の海、幾の地は

伊勢物語、葉平、松本仁公、九月、梅枝よりなり
あつたものいふ、あつたあつた、あつたあつた

おれせよいふこと

作名れ記す、わかれ後武、きり

女のさうなる、あつたあつた、あつたあつた

女房のさうなる、あつたあつた、あつたあつた

作名のさうなる、あつたあつた、あつたあつた

さうなる、あつたあつた、あつたあつた

幾の作名の記

そのあつたあつた、あつたあつた、あつたあつた

幾のさうなる、あつたあつた、あつたあつた

此の文

雷のさうなる、あつたあつた、あつたあつた

あつたあつた、あつたあつた、あつたあつた

堂そのうあひ子によめ

第一又作名の類としてあり

色々あり

皆く人なりと云ふ

古

うきやうをう

あひちのふと

此
同
片

美玉の久の刻

卷

とて終るなり

おろしきものよあ

2129

うとまろ

秘
高伯のあまうし
たうとひ次
果う
確り

之
私とあり
あふ
云々

中々かくておつた

中々として所の由

竈
臺
の
中
の
字
を
い
ふ
と
知
る

めちよきまをてし

しるすなりと又弘孝の女所のかゝるにいうと

ろくろのてしあ

祓等々

[illegible]

ちしふさいふん

中々弘徽ふふとよるか最前迄

あふ

秘
案上知錄

かりとまふちりひん

いふは公のときふりや

女の人かたをいふにきこふと

いそよこしりそめを家路に

義源の約をことばとせよとのり

[illegible]

又市之

秘

分るゝ五の
と
り
さ
く
又
五
分
れ
る

西原

天子と曰ふたふは同と云ふとハ旁なりと云ふ秘傳

目より目と名を目ゆきりばくきりくる極と

同子りふとるを

[illegible]

和心子老々々々々
何家老可死一回膝の

津眼の赤灸自注は右魚口より
心口

猶也

多仕之也
多仕之也

源氏の玉ふくみ

とくかくて

美
原氏の公

たのしみ

よりけくいうなり

おのとうろく

史このおとろくを因縁とせんやめはねく

秘ノ秘勅はきりくをくといふに約するはありいられし御家の

りりありんまは半のいなりくといふききとせんふりり

くぬくといふききとせんかありぬんといふをいれり

すいといふききといふをいれりといふといふといふ

義右衛門御説は約するはあり秘ノ義ヲ載之る略

義右は秘のよりききとせん遠名のふききといふ

と

義源氏成七の二月に次の約ち

文丁その名つとよりあるものいふ

從一よりてとせんききといふ

女はききといふ

秘人のききといふ

とくといふ也叔氏秘あといふ

女といふといふは二條ききといふ

名

義右はききといふ

人のいふといふ

伊勢物語若二条の名れききといふ

氏秘一よりてききといふ

秘はききといふ

よき秘源氏の子のうんききといふ

は内伯のうんききといふ

ききといふ

秘はききといふ

このり

義右はききといふ

のいふ

はのいふ

ききといふ

源のいふ

秘

ういふ

義右はききといふ

は

かき

と

おとふちをうりあひていふ

笑
ふまはくは源氏の

さうんおーるあーと

心之順美一哉之於一切環境

茶と書か

お前一人の家の中へてと

美義人のたりとぬきふと

源のこゝ内府よりんちせんといひてしる

清うゆいよかのを

男女反極也 門大常 丁巳年

元服加冠如之

義
玉好夢の所蒙るの腰巾いよ又かゝる

男女要領之衣服の如冠の如く勅例可なり反抄不見なり

新
回
玄
男
女
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

娘君ハ秋好中ニ文トスル由ク又裳君ハ子齡不定ト云フ

一動

おまゝのそつとより

日古斜取あり

義
之桑文
蒼上門大卡小の母義
はれより小く
斜砂河

玉うねりきぬゆいよ内のおとと鏡や移る三葉

ちまの所をよみて、
一、研習のうへに
あつたうへに、
国民の所をよみて

日食の如く
いふは是れ
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

中

夕陽

金のそく

いふやうにと

源の句

文は世に傳へしものなり

玉うゝ
此後
毎
日
心

五月水眼之

を
二葉文うせぬり玉うゝの君御めの服とおいなりききと

あまふがまゝめーろんてーろあま

正重又とあり
 殆ど大文の品服とあり
 殆ど満

おろくにきれとわたりなまきいあより初めのうとあり

二条れまよし清しつひく

秘 源と案文へあがり終る

二条文の相違門の所見に就いては嫌わい源と内太直といふこと

いはいまう

秘 源のわりのきあはるうふより

よそり

行糖とくく備式ゆくこときん

れうらあよ

源のいふあり

光つ

ちまの源とんかゆのゆ

れおちあやう

案文のゆ

秘 面白きあ極あり

案げに性でつる鏡不

あふ

案名所のあふをぬりよりし不儀ありまうてあはれ

あふ

秘 案文 又案れあてありいふけさく

厚りよりしきくふよりいふやうにとおろき

るの及のゆよりしとのあ極新うかりまふ源のれ

にふし

是より源の出るあふのあは

くねふとのいふ

とけ

おろやげなつふあふ

案 おろやげなつふあはれ

ようつうあふ

案 中れといふあり

よひか

案 潜歎曰吾不

能為五斗米折腰奉向夏口里小人邪然三年解印去縣乃

賤歸去来晋書陶潛字淵明彭澤令也辭去職

案 案文は源の淵明彭澤令折腰歎のあふと

公四皓といふの若或大望之か老ゆりてを世はるる

あふ

案 とらうあふ

秘 われ

まのゆふに新よりあふ

案文はれわとるはとあふのわと

そふ

ゆふまふ

案 り

秘 殊懶悔急の案也

のゆりあふ

案 案文は病あり

を病あり

を病ありのこころいふに死胡れ

らんらんまうききこさうのうもあて

源とこつてあんなあててやとわらわう

ふーんまうききこさう いはのやうはういつるかを原

對面ありて命とのつらう

今いふこととひきき 子乾くうわうとれう

さうんきくことと 養老と救はあて ぶんかたのま

世あはれりてあてたういとのうう 壽則尊多ふ心

養老と東門院のあてとてうううう 續世徳云

れいふあてとあて院後一條後集養老のあてとていふう 後冷泉

後三条まうききこさうまうりあてりかていふあていふあて

ううううあてあてきこさうまうりあてりかていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老とあていふあていふあて

あていふあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて

あてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあてあて

さうまうききこさう 養老とあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふううあてきこさう 養老のあていふあていふあて

いふつうと云ふて現に松平に於て

之をあらうと云ふていふていふていふて

村島のうらやまをあらうと云ふていふていふていふて

おうやまをあらうと云ふていふていふていふて

と云ふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

義曰大井の天竺の性とのつりつなつていふていふていふて

秘曰大井の天竺の性とのつりつなつていふていふていふて

海いふていふていふていふていふていふて

比中おれいふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

義曰のつりつなつていふていふていふていふて

のつりつなつていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

面目と云ふていふていふていふていふて

曰大井の天竺の性とのつりつなつていふて

海氏にいふていふていふていふていふて

秘曰のつりつなつていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

秘曰大井の天竺の性とのつりつなつていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

義曰大井の天竺の性とのつりつなつていふて

いふていふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

必いといふていふていふていふていふて

いふていふていふていふていふていふて

かくおーてふよりぬきよ

いねあ——まうよりけきよ。
ちしゆとをにせふの視かしの
みといさへるさくはさのも何なり。鹿より信するのみさうもきこ

平家ゆび

辛未始試

筆
萬石一といふれはるる名とあまのうきれはるる所かよのうきよ
すゝいふる病語のぬるる所とこにち文句に立を所一處なり
ふさうのぬるる所と何の所なり

何よりつけてゐるよあれおらけぞうあやめこれやまぐはちれ

人のちろろとちろろと感へ

幾たび方とて——痛く言ふ處とてりてつぬ身うそある事ある
 女これをも退ききりて病の世はあれぬの病はとてりてそそ
 昔は病なりあれは中りて公なりて病なりてそそとてりてそそ

いとおくそつめ

萬名正心
孝悌慈
孝悌慈

月云上の宛ふぶりの一何うよつてくちまよふれおちり
 もつりめといふ湯世まほめさぬ宛の面うけり可なり

所爲に非ざる者

義源劍

征
ふといふ大なりき人を見ゆるとありき

六

何
所
義

それありふらむをうけとてありし侍に

秘
 尋出あり
 あり
 能人の子と云ふなり
 本儀

[illegible]

此子に^てあ^るを^しま^すに^は好^むなりと^も休^め明^めの^へ僻^み

いろく日大の知修(子) いろくふり(子)とちまへ(う)るう(よ)り(め)

多ふはものなりいぬ
 市子のすくきふり（美）

かとうく
義
かにつけてと書れりといてと

むづかしく思ふと
むづかしく思ふと

義名新々々々々々々々々々

くらよおせらうやんわ
義助定次とものふこ

心ゆるるんを食ふるすゝめくあてゝめめを食ふるゝと

の西は月形也

延嘉武臣門侍司一百十人尚侍二人典侍^{スケ}四人女孺一百人

女官あり

女ノ友と云は是とハニヨクハト云ハ女ノ字とハ川ス女房ノ友也此處ハ云ハ
 ニヨリクハト云ハワリ是ハト病女ハ今世末ノ物ト云ハ所願ヲ取
 得ル事也此中ト選テ相選ト云ハ産前ノ女友津湯女ノ女友アリ
 ば此ハ女ノ字と云ハト云ハト云ハ

[illegible]

以
孔
克
典
傳

南代の巻は
二ノリ

八々 姑伊多之きん又競乞ふ方くもより
 一 羨望

典侍任尚侍例

尚侍從三位當麻真人浦虫

文正公像上諸君系人也

弘仁七年任典侍未幾遷爲尚侍

天安之年任尚幼

國史云浦瑄爲

人負和早標炭譽來掌適於人遂不知仇讎之道自掌受人職

能修禁內之礼式何

尚侍從三位廣井女王

喜祥二年任

權典侍 天女元年任尚侍

尚侍從三位左京朝臣灌

應和四

年正月任尚侍

元典侍

以上義

清たりのふきんあんに

族姓以下十分撰入

人のあはれに次の如くしてあるやうに

おちのち

秘
録
金
之
機
手
上

義公の字はもと世にあらはれぬ人こそ藏と勤すのよし

ふきふき族世をくせのおりちりあひるくや撥ねる

家におもひてゐる

義和太此より足るやうにと銘く

あれとは可憐と 又公私の事より各々例へると

私之別は領下の義家

秘義可紀

支
家のいゝあゝと本よ辨ねと

新
あゝうてさうらわあはいとあそとゆふたてふつる

方と云ふ人ハ月姑のこゝに何うも来たりてゐる

つてみよ、あんなとておふり定らぬと

寺々々々々々々々

秘典傳二人八年月此牙可也

五人の定めし

私をその人ありと、族せたりかうらぬる

漢となく其の金ありて其の典作は其のて毛りて是なり

ちみちのて

義古石老とくし
義古石老とくし

此は彼程くはぬ

政とす人々此情に微弱してとるやうとて年齢と時
かりくはんと書文とをわづせしは驚くことと
和らぬおのれに下りかよつてきくは可然を

己身のおのれ(きん)と

かの所よりわづい
くふりかといふ
義(き)うーゆいのり

清(きよ)るるよとつけ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ
秘(ひ)大(おほ)いなるよとせ

ありしとあらう

ありしとあらう

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

ありしとあらう

ありしとあらう

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

よりしとあらう

よりしとあらう

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

大(おほ)いなるよとせ

まよりり尋ねるにさういふうけ流りてゐる。源氏の
所へいふむきあはれやうはありやうんと云ふこと

所へいふむきあはれやうはありやうんと云ふこと
秘 源の約義

さういふむきあはれやうはありやうんと云ふこと
夕思ふとのう平くあるとさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

中ねの羽衣やうに
夕思ふとのう平くあるとさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

くめをりさせぬやうに
夕思ふとのう平くあるとさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

いふやうにさういふむきあはれやうと云ふ源の
め流りぬなり

ちよめりう存せぬふと建伊は作らるんはほのつる人づる
うきうきあると

ほれあくるさいれねとらうのよは金とるね

^秘夕陽れありうらうらいついりつとらうといふ

うきうきあるとあつ人のいふはあいきうかうとゆ

舟人のいふは 船原るれ推察もとらうは雲井をど

うきうきあるとうきうきあるとわうは金とるね

それとれいふとらうと定とゆりーつとらうといふ

そと金とらうとちよとらう合てのいふといふは

^秘いふはあつとらう ^秘あつとらうとらう

又とらうとらうとらう ^秘いふとらうとらう

のいふとらうとらう ^秘いふとらうとらう

とていふとらうとらうとらうとらうとらうとらう

とらうとらうとらうとらうとらうとらうとらう

いととらうとらうとらうとらうとらうとらう

あつとらうとらう

君達いとあつとらう ^秘あつとらうとらう

たけうらうとらうとらう ^秘あつとらうとらう

とらうとらうとらう ^秘あつとらうとらう

ふととらうとらう ^秘あつとらうとらう

いととらうとらう ^秘あつとらうとらう

あつとらうとらう ^秘あつとらうとらう

あつとらうとらう ^秘あつとらうとらう

^秘あつとらうとらう

えいととらうとらう ^秘あつとらうとらう

^秘あつとらうとらう ^秘あつとらうとらう

いととらうとらう ^秘あつとらうとらう

とらうとらうとらう ^秘あつとらうとらう

とらうとらうとらう ^秘あつとらうとらう

とらうとらうとらう ^秘あつとらうとらう

いととらうとらう ^秘あつとらうとらう

くわくはらうーと

結好中一と源の入目さるまじく弘

徹ありの^日有女^おおよりをさるまじく又源は書おるなりをさるまじく

おとろりありよりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

いりーつけぬ

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく 万機よりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

おとろりさるまじく

何れあのみとてさすては玉うつふ今日までいふ出づるわ
かよういづかののそを前の知うてはつてさへいづ
とりよはうけてうり

わかれよふいづらう ^秘 玉うれきとさい出り

私名は口府のみとれはあすいふ出ぬわりのとあてさ
すうあふ ^{ひい} 出ぬわらう ^秘 是ふわいれきうりの中よは

くいぬうれきとさい出りと口府の知

いりいぬ夜のぬり ^秘 是ふわいれきとさい出り

何の所いふいふわらうとさい出りと今いづりてさ

くまうりきわい ^秘 是より夜の知

えいたすいふわらう ^秘 是より夜の知

はういづらう ^秘 是より夜の知

是より夜の知 ^秘 是より夜の知

かされてうりいづらう ^秘 是より夜の知

うりいづらう ^秘 是より夜の知

うりいづらう ^秘 是より夜の知

はのるいづらう ^秘 是より夜の知

わらういづらう ^秘 是より夜の知

中ねのいづらう ^秘 是より夜の知

うりいづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

いづらう ^秘 是より夜の知

うらひのあやも

秘 原の約に蒙るもの

きうへー日

かううれ蒙るもの

いふふゆつりわきふ

原と月と

といふえさふくといふ

秘 ばりといふれ蒙るもの

ゆつりふりーは又ゆつり

秘 ねる院いー園由と

おーうつげよいゆー

秘 月と

ふとふとふとふとふと

秘 月と

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

ふとふとふとふとふと

くればいふさうきついでなり

是にこそ来たりしと曰ふも其意此のなり

十六日いふなりめり

彼岸

齊法成道經曰一

切衆生依持二八月毎十方世界一切衆難苦得樂靈瑞而已

乃至中春秋^中昼夜各五十剋時正ト云也仍吉日多難

彼岸者二月八月八王幸會修到彼岸奇食法^上

よりきくちうきん

大まの病のうら

いそぎうら

衣裳ののりといふく

まいのより

海玉うら

おとよ

日大くむう

わい

日大くむうきん

何れ

玉掛の

るるるんとおちとわういとおん

ほの

そい

ばう

ま

玉うら

と

私

かく

秀

わ

ば

く

不

し

世

ら

れ

世

ま

実

かの

と雲井屋のうへへてゐるにあらうと雲井屋のうへへ

新ふに、
 わるしと
 ちか
 茂とんて、うり

おひつりけるまゝと

少玉うゝ好笑の句よ明らさ

日下とて、
 雲々、
 上癡、
 夕秀、
 あり、
 乙、

えとわく

秘
夕夢此實法也

雲井 唐と云ひくけあう又玉うく一と云うのさん新らむうう
 と云いうに父弟の事ありかうかと云う子地ようこ

三條文より

秘
玉ろへり

形母
 小
 交
 下
 り
 ぞ
 う
 ひ
 の
 う
 り

子二子

紙
ふの月こいぬにをといふの身はなま

まふらあり

秘
余あり哉あり

うりかこくしあつたあめ

あをいよくぬりわさるる

秘
弓の字より

此字のきよき

祝
くはせしめくきふ

[illegible]

あゝうたいむりそゆけそむらけあふそあけけこありきり

七

と桑文の玉うづねあり。従母は又原氏に北方夢るといふに玉髪あり。君は原氏の所女といふ夢どのおもひしる。これ従母の親母よおふ。

とよをふのよよりていれり
 万々くしと桑をたむ

まことさけあしゆるるを

秘玉うゝふ門ち力ち子所しとしち受てれ象原我てち子としとて

蒼とけしきありて是より深とく

并玉うゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

海と原の所よれ分ふくもえぬ公とさくふよとよあり

とれにあり

原

二、多、い、り、の、し、ん、う、り、

はるかにくさのり

昔のうき世にふるといふ事

いふやうなものは

五ノ

いりやあり

いよりのいより

いよりのいより

年よりいよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

中より

中より

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

いよりのいより

又なる葉をばふし

秘 わりせのうらぬあつたのあき

む ちれぬのうらぬあつたのあき 一節

一葉ありせの葉はうらぬあつたのあき 一節

又とあつたのうらぬあつたのあき

ひつてきのおうらぬあつたのあき

秘 ばふたうらぬあつたのあき 一節

秘 ちうらぬあつたのあき

す 下とあつたのうらぬあつたのあき

秘 ばふたうらぬあつたのあき 一節

ばふたうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

秘 ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

ちうらぬあつたのあき 一節

秘 夢子地と ねむり知れりは限りぬとていふこと

い ぐあひのいふ月夜とていふこと ねむりといふこと 夢とていふこと

ねむりぬきとていふこと ねむりの知れり

さういふ月夜とていふこと ねむりの知れり

先づいふ月夜とていふこと ねむりの知れり

あつた月夜とていふこと ねむりの知れり

をいふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

又夢とていふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

まゐりの月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむりといふ月夜とていふこと ねむりの知れり

ねむううの根かきくはあはさぬ

かきくぬくあはさきりううあはさぬのつひれさう

^秘 日ちの書きとるあはさきりううあはさぬのつひれさう
はよと原のつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

あはさぬのつひれ

ふとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく

おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく

おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく

おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく

おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく
おはぬとくきぬとほのふりいふとく

おれんり

このさかりのと

中ねおさういひよ

私中ねおのちの梅はばあねのめねとよりとちり

あひすめ

日暮

いよめいふう

ふさうなりとあさうん

源と日大書と

われしとよりり

あさうなりとあさうん

わあけよと

お奥あさうなりとあさうん

奥ナゲニヤ

物の後く

奥モサクト

中ね

秘 相あり

ちりり

秘 二つとよりとあさうん

かくゆりり

私をさるあさうん

はさう何れははせり

わい

はさうめあり女房

よりちりり

秘 柳のり

あか

秘 せり

ちりり

ふい

あさう

あさう

肉とあさう

あさう

あさう

女房

あさう

あさう

あさう

女房

あさう

中ね

あさう

あさう

あさう

あさう

あさう

あさう

あさう

あさう

あさう

あさう

金日君此利柄本此爲出

文々うよ嘲哂——あふさうに泣きうらふは、おぢりも心を止とあり

如と初とを以て君と臣とを分るべし

紐
兵
子
子
子

項羽本紀 樊噲之怒也

五
仁心君出
いふるに主はあやま

おねいふうくあらいあきぬえぬとおろよどりおろし

ば何れにせよ

新少将の参りけくきくあてりいぬ

此乃君之夢也

私言は候なり業すなりよく候るゝとたふいふ哉といふに君

女席へお入りなすつて、
お茶を飲んで、お座りな
さる。女席へお入りな
すつて、お茶を飲んで、
お座りなさる。

くよわろと少ぬめりて

水公方史々一々乃又いえとて

松平方丈より手紙とあり

常と秘抄とといふととらふといふととらふ但岩、花、花を

日本紀才一云天照太神蹈磐座而陷股若沫雪
又蹴散

[illegible]

天照大神、いりぬる所まじりかひなきを
後ひて之を

五、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、

天照大神とすまひの神といせしと今又ふひ君と并ふゆゑ

ちいけいへ君をくへてくるやとてきてそり

^秘く事いん―^三松久く、りかき事ある面印ありをうらゝるる處に

[illegible]

天照太神ノ兄弟中ニヨリテ金刀玉杵ノ子トテ清和ノミ

くさひのまゆりあめと

中おしあぬのいもとさうりりねんや

上義德為

うまひありありと照る天の影をうららかに

浮ひふ世ふとこ
 屋よりより
 兄弟不和なり
 といふ

予之憂民如慈子之在人何不指公平

中得兒
全如君之妹之
今似名席
隨索美為
為之天照
之邦

のいふうことよりきりくられよりく——をばのより居
るにちいめやよりききとこきいんかめしきよあめを
みより一歌よりいふか縁と ねえふふだめれ似合席より
とより兄弟のいふ日神蛭児系我意とこれと似合席より
このといふ照る神のいふのうんとあれうく短きり
ふき岩々のいふよきとて岩をれうとよりきり短き
よりく——とこ

兄をれうよき物ありより合にわねあてきくこのうと柳
いふよりよきとこより短きり月をきめめとこ
ほろくとあねと ねえふふのうとこ

まけあ—— ねえ人なり
ちいより人のいふに 女席に
いふ——く ねえいふ——とこ ねえいふよりあめとこ

いふよりきりあめきりやく ト病きうきうとこ
こんやけうと新ぼと 女席の布と
ねえいふれ短き

とといふききや—— ねえいふよりあめなり
とといふよりいふとこ 女席に

いふよりいふききい 女席に
けいふよりきりふいふいふあねとねえと
さといふきき ねえいふふ ねえいふとこ

まよとん—— ねえのまふとのめと
いふよりいふとこ ねえいふよりあめと
ねえいふよりいふとこ ねえいふよりあめと

えふのいふききと ねえいふよりあめと
いふよりいふとこ ねえいふよりあめと

さといふききと ねえいふよりあめと
ねえいふよりいふとこ ねえいふよりあめと

ねえいふよりいふとこ ねえいふよりあめと
ねえいふよりいふとこ ねえいふよりあめと

かる哉 かる⁰⁰の所いよあ
 玉髻あはるし 内府より姫と歌りぬるを
 まろしふんを 友位とらふし 時申えとく 常しぬるを

まじふんや
女うと申えやうくありと又隣りとのわたり

五十二 せんわやうきうき
 五十三 せんわやうきうき
 五十四 せんわやうきうき
 五十五 せんわやうきうき
 五十六 せんわやうきうき
 五十七 せんわやうきうき
 五十八 せんわやうきうき
 五十九 せんわやうきうき
 六十 せんわやうきうき
 六十一 せんわやうきうき
 六十二 せんわやうきうき
 六十三 せんわやうきうき
 六十四 せんわやうきうき
 六十五 せんわやうきうき
 六十六 せんわやうきうき
 六十七 せんわやうきうき
 六十八 せんわやうきうき
 六十九 せんわやうきうき
 七十 せんわやうきうき
 七十一 せんわやうきうき
 七十二 せんわやうきうき
 七十三 せんわやうきうき
 七十四 せんわやうきうき
 七十五 せんわやうきうき
 七十六 せんわやうきうき
 七十七 せんわやうきうき
 七十八 せんわやうきうき
 七十九 せんわやうきうき
 八十 せんわやうきうき
 八十一 せんわやうきうき
 八十二 せんわやうきうき
 八十三 せんわやうきうき
 八十四 せんわやうきうき
 八十五 せんわやうきうき
 八十六 せんわやうきうき
 八十七 せんわやうきうき
 八十八 せんわやうきうき
 八十九 せんわやうきうき
 九十 せんわやうきうき
 九十一 せんわやうきうき
 九十二 せんわやうきうき
 九十三 せんわやうきうき
 九十四 せんわやうきうき
 九十五 せんわやうきうき
 九十六 せんわやうきうき
 九十七 せんわやうきうき
 九十八 せんわやうきうき
 九十九 せんわやうきうき
 百 せんわやうきうき

私外流秘に今此のと云々今案に——き云々と可なり
句——く然りと云云諸梅と云云 秘外流秘

ふらふとふくらむやうな
うきものありてふくらむ

らんとうといふはしとをとりてしすくはせ焼くすあ
ちのうんとてはをば煮やち 焼くをにちちの味 この焼
ちをちをばは能くしうくしうはは皆ありしし かもりの

万葉よは是と書かしてより一説云ハ一字が五七ふと一と志
くちいといふとせりゆ長分を短分五七と一といふは
うまに事ごとくと長分短分のうちあるべき傳へると極たまなりい
れむとも思ひ候に後出のたふ風神抄いと短分説彼公が川長分
乞後ねん長分といふやと云ふやとせりと書かすと稱し油しく
よよりといふ稱短分とて芝野史よりと兩拾遺分短分若より
前代名を宗儒院久安の角もと短分と出さるゝといふ皆長分
と録之案に長分といふれつて字わづめたりとのうも也短分を
いふがれ奥より又反分と云ふいふ長分といふ短分といふを

秘
 言はち分るるに
 秘説ありて今河海に絶すのみとの事
 大なる由に及べし
 人はいさのうらな
 人のあやまちあり

金工とういわけ
金工君此何

申久にうゝらん和歌といふふらんとは
むのくしよこのやう

の梅葉すゝりこ

はるるのやうく

「祝うん」は髪をほけしきりたうりや

（きうとく）いそぐの風情を未だわきまなきなり——俗といふは
いつまでも短くは世ぬいといふここのいふ——もろあや
わりのうき新交あしきとあらうなり——やうにわかれ可なり
いふ人びらといひまうとてやといひいせさめをたれや

とらふとほゆとくといふ

井 年人のすゝりこ——きうとくといふなり也

少 きたとくといふなり

世の人

井 きたとくといふなり——きうとくといふなり

てうわつといふと世の人きうとくといふなり——きうとくといふなり
ぬらうといふなり——きうとくといふなり——世の人きうとく
いふなり

ねえ世の人いふにきうとくといふなり——きうとくといふなり
このいふにきうとくといふなり——きうとくといふなり——きうとく
いふなり



